サーモンパークと千歳サケのふるさと館

－千歳青少年教育財団設立三〇年に寄せて－

菊池基弘
千歳サケのふるさと館　学芸員

はじめに

秋の訪れとともに北洋でたくましく成長したサケが、今年も千歳川に帰ってきました。千歳川に設置されたインディアン水車が次々とサケを捕獲する様子は、千歳の秋の風物詩として全国的にも高い知名度を誇っています。

平成十七年六月、このインディアン水車と隣接して、北海道八五番目の道の駅としてオープンしたのが、「道の駅・サーモンパーク千歳」です。敷地内には農産物直売所、レストラン、各種売店などが点在しています。この場所は最初から道の駅として整備されたものではなく、道の駅認定以前は「千歳市サーモンパーク」、または愛称の「インディアン水車公園」と呼ばれていました。そしてその中核施設に位置付けられていたのは、現在の道の駅においてもセンターハウスの役割を担っているサケ科魚類を主体とした淡水魚水族館「千歳サケのふるさと館」です。

写真１　千歳サケのふるさと館　屋上の三角形のモニュメント（採光窓）は群泳するサケの背びれを表しています

わたし自身、千歳サケのふるさと館オープンの前年から、運営母体である「千歳青少年教育財団」のスタッフに加わり、今日までおよそ二〇年にわたり学芸員の一人としてふるさと館の業務に携わってきました。しかし、「サーモンパーク基本構想」策定の二年後に設立された千歳青少年教育財団の歴史は更に古く、今年で設立三〇年を迎えました。また、本年四月からは、公益財団法人としての認定も受け、三〇年の節目の年に新たな一歩を踏み出すこととなったのです。

この機に、千歳青少年教育財団の三〇年の長きにわたる歩みとともに、サーモンパークと千歳サケのふるさと館の歴史について振り返ってみたいと思います。

サーモンパーク計画の始まり

昭和四十五年頃、日本の漁業を取り巻く国際環境は、大きな変化に見舞われていました。二〇〇海里専管水域問題、海で成長し産卵のため海から川へ遡る遡河性（そかせい）魚類の母川国主義、北洋漁業の規制強化などといった水産資源に関わる問題がクローズアップされ、捕る漁業から育てる漁業への転換が始まり、さけます人工孵化（ふか）放流事業に新たな期待と注目が寄せられるようになってきました。

一方、ほぼ時を同じくして、全国的な観光ブームが巻き起こりました。千歳空港と支笏洞爺国立公園を併せ持つ千歳市も例外ではなく、中でもインディアン水車によるサケの捕獲は、全国的にも人気を博し、秋になると

サケの遡上と水車による捕獲の様子を見ようと、多くの観光客が千歳川に集まるようになっていたようです。その数は年々増加する傾向にあり、千歳市としても周辺整備の必要に迫られてきました。

このような時代の流れの中で昭和五十四年、千歳市における観光開発や、千歳川周辺の都市整備などを目的としたサーモンパーク計画が議会に提起され、翌五十五年には千歳市サーモンパーク基本構想が策定され、計画実現に向けた歩みが始まったのです。

千歳とサケの関わり

ここで、なぜ千歳にサケをテーマとしたサーモンパークだったのか、その原点ともいえるサケと千歳との深い関わりについて少しひもといてみましょう。

今日でも多くのサケが遡上する千歳川は、このところ四年連続で環境省が定める湖沼水質ランキング日本一に輝く支笏湖を源としている一級河川です。支笏湖から千歳市街地へと至る流域は豊富な湧水をもたらす樹林帯に覆われ、サケをはじめとする多くの生き物を育んでいます。流域には川の恵みを求めて形成された数多くの遺跡やアイヌ文化の営みが息づき、サケが遡上する千歳川に生活の糧を求めて、遙か昔から人々が集まり住んだことを示しています。

また、北海道庁の初代水産課長となる伊藤一隆が明治二十一年に孵化場を建設し、日本における官営のさけます人工孵化放流事業発祥の地となったのも千歳川です。サーモンパーク構想の発端となったインディアン水車は、伊藤が紹介したアメリカオレゴン州のボンネビル川で使用していた設備を参考に作られたもので、孵化場建設から八年後の二十九年、捕魚車の名前で、日本では千歳川で初めて使用されました。以来一〇〇年を越えた現在においても、多少形を変えてこそすれ、ほとんど原型の姿のままで、千歳川を遡上するサケの群れとともに、その歴史を受け継ぎ存在し続けています。

さらに近年では、サケは空港建設とも関わった歴史をもっています。大正十五年八月、苗穂（札幌）‐千歳‐沼ノ端（苫小牧）を結ぶ北海道鉄道札幌線が開通した際、記念に小樽新聞社が、その頃、東洋一とも称された孵化場（国費北海道水産試験場千歳支場）での読者観楓会を企画しました。この観楓会参加者の千歳駅到着に合わせ、歓迎飛行を計画していた新聞社の飛行機を間近に見たいと、千歳村民が力を合わせて着陸場を造ったのです。ここに着陸したのが「北海」一号機であり、造成された着陸場が空港の礎となり、時を経て現在の新千歳空港へと発展していったのです。

このように、千歳市はまさに千歳川とともに、そしてサケとともに歴史を重ねてきた街であり、だからこそのサーモンパーク構想だったのです。

千歳青少年教育財団の設立

話しをサーモンパークの建設に戻しましょう。「千歳市サーモンパーク基本構想」が策定されたことにより、いよいよ関係機関への協力要請が始まりました。サーモンパーク計画においては当初から、中核的建造物となるパビリオン（現・千歳サケのふるさと館）の建設が予定されていました。そのパビリオンの運営に当たっては、社会教育的な性格を持つ公益法人が適任との判断から、昭和五十七年三月十二日、北海道教育委員会の認可を受けて財団法人千歳青少年教育財団が設立されました。この財団の設立によって、サーモンパーク事業は観光、都市形成の期待とともに、社会教育を目的とする事業として位置付けられたともいえます。また、この後、サーモンパークの公園整備と用地の取得については千歳市、パビリオン等の

建設については千歳青少年教育財団の事業として、分担することとなりました。

しかし、用地の確保をはじめとする構想の具体化に当たっては、最初から多くの難関が立ちはだかっていました。サーモンパークの予定地では、既に北海道開発局による千歳川改修計画が持ち上がっていましたが、サーモンパークでは千歳川を遡上するサケの群れを窓越しに見ることができる「水中観察室」を、国の河川改修に併せて整備したいと考えていました。しかし、一級河川の護岸に空間を設け、川の中を観察できるようにした施設など、日本中見回しても前例がなかったのです。

また、当時は水産庁が管轄していたさけます増殖事業計画との調整も重要課題の一つであり、サケの捕獲を行うインディアン水車とサーモンパークの位置関係は、まさに構想の生命線ともいえるものでした。

こうした関係機関との様々な調整を行い、諸問題が解決され、「千歳市サーモンパーク基本計画」推進の基本的合意が成立したのは、基本構想策定から七年後の、昭和六十二年のことでした。

千歳サケのふるさと館開館に向けて

関係機関との合意形成が為されたことによって、計画は実現に向けて着実に進み始めます。河川敷地や水産庁管理用地との整理が進む中、サーモンパーク構想に沿って、まずは昭和六十三年に北海道開発局による千歳川の河川改修工事が始まりました。平成二年には千歳川低水位護岸の建設に着手、伏流水の浸み出しなどに工事は難航しましたが、翌三年には世界初となる河川護岸を利用した水中観察室が完成しました。その一方で、同年には社会情勢の変化を踏まえ、サーモンパーク計画とパビリオン設計の見直しが図られました。

平成四年には公園建設工事が着工され、六年のオープンを目指し、インディアン水車を観覧できる人道橋（現・インディアン水車橋）の建設や、河川敷地、駐車場、公園広場などの整備が、急ピッチで進められていきました。五年には、ついにパビリオン本館の建設工事が着工されるとともに、当時ヒメマスの養殖を行っていた泉沢ヒメマス養魚場の隣に、パビリオンに展示する魚類を育成する予備施設として、泉沢飼育棟が完成しました。

写真２　完成間近の千歳川水中観察室　支笏湖落口から約30km、石狩川河口から約70kmの地点

パビリオンオープンの前年となる平成五年、新たな財団スタッフも次々に採用され、運営体制も少しずつ整ってきました。当時はまだパビリオンが完成していなかったこともあり、財団事務所は仮住まいとして、千歳市青少年会館の二階に設けられていました。わたしが飼育係として勤務を始めたのもこの年からでした。

冷房の全く効かない夏の事務所の暑さは、今でも鮮明に覚えています。しかし実際には、飼育スタッフは事務所にいることはあまりなく、泉沢飼育棟に詰めていることが多かったように思います。飼育棟にはパビリオン

の完成を前に、展示予定の生物が次々と運び込まれていました。全ての水槽を満たせる種類と数の生物を収集することはもちろん、それらの生物をオープンまできっちりと生かしておかなければなりません。飼育魚類の大半はサケの仲間で、それまで飼育経験などほとんどなかったため、泉沢養魚場でのヒメマス飼育技術も参考にしながら、少しずつノウハウを身につけていきました。あまりに忙しかったためか、正直なところどんな順番で魚が搬入されたのかといった記憶は曖昧になっていますが、唯一搬入時の記憶がはっきりしているのは、岩手県釜石市から搬入された体長一㍍を超える大きなシロチョウザメです。この時、生まれて初めて新聞社の取材を受け、チョウザメと一緒に記事として掲載されました。

余談ですが、当時搬入したシロチョウザメ七匹のうち、最後の一匹となったメスは、昨年十二月、二三歳まで生存していました。二〇歳の記念に、当館の魚類としてはただ一匹「ハクちゃん」という愛称までもらい、思い出も多かった個体だけに残念でした。

パビリオン建設工事から一年後の平成六年八月、オープン予定日を一ヵ月後に控え、建物が完成しました。この頃から新聞記事などでは、「パビリオン」ではなく、「千歳サケのふるさと館」の名前が見受けられるようになってきました。

北海道では既に「サケ」をテーマとした水族館として、札幌市豊平川さけ科学館と標津サーモン科学館が開館していました。先輩館が「〇〇科学館」を名乗る中、千歳サケのふるさと館という少々異彩を放つネーミングは、一般公募によって選ばれたものです。今日では、常連の皆さまからは「サケふる」という短縮名でも親しまれ、サケと関わりの深い、千歳らしい名前ともいえますが、館内に入って大きな水槽を目にされたお客様から、歓声とともに未だ時々聞こえてくる「わぁー、水族館みたい」の一言は、名前から受ける印象と無関係ではないような気もします。

建物の完成に喜ぶ間もなく、怒濤のオープン準備が始まりました。まずは青少年会館に間借りしていた財団事務所の引っ越しが八月十九日から始まり、二十二日には泉沢飼育棟からの生物の移動も始まりました。しかし、直前に迫ったオープン予定日に焦る気持ちとは裏腹に、頻出する機械トラブルや展示生物の搬入遅れなど、次々と新たな問題が起こり、準備の進行は決して順調とはいえませんでした。しかし、それら諸問題を多くの方の協力と努力で乗り切り、平成六年九月十日、千歳市サーモンパークの中核施設となるサケ科魚類を中心とした淡水魚水族館‐千歳サケのふるさと館は、ついにその産声を上げることができたのです。サーモンパーク構想策定から、実に一四年が経過していました。

オープン当初のふるさと館

オープン初日、開館前には既に行列ができ、待ちかねた多くのお客様がテープカットのセレモニーとともに、館内になだれ込むような状況でした。最初の二日間の入館者数は一万人を超え、九月十八日には当館の一日あたりの最高入場者数となっている六一三六人を記録しました。九月二十八日には、早くも入館者数五万人を突破、そしてサケ

写真３　千歳サケのふるさと館オープン　オープン初日は土曜日ということもあって長い行列ができました

の遡上が本格化している十月二十日、オープン以来四〇日目で入館者数一〇万人を達成するという勢いでした。

当時の千歳サケのふるさと館は、淡水生物を中心とした水族館としては、全国でも最大級を誇っていました。幅一二㍍、深さ五㍍、総水量二六六㌧の大水槽は、淡水の水槽としては日本一の大きさで、巨大な水槽があまりなかった北海道の水族館としては、目新しいものでした。館内では、支笏湖から千歳川、石狩川、そして日本海へとつながる流れを再現した渓流水槽や、サケ科魚類の稚魚などを展示するコーナーなど、大小合わせ二〇基ほどの水槽で、約五〇種類の生物を展示していました。

単に水槽を泳ぐ魚を見るだけでなく、サケの稚魚が音楽に合わせて泳ぐ向きを変える‐ダンス水槽、来館者がスイッチを押すとロボットが水槽の魚たちにエサをやる‐エサまきロボットしまくん、魚やザリガニなどとふれあえる‐タッチプールなど様々な工夫を凝らした水槽も人気でした。水槽以外でも、三つの映像を連動させる三面マルチ映像技術を導入し幅九㍍の大画面でサケの一生を解説する‐サーモンムービー、コンピューターを使っての対戦式クイズゲーム‐サーモンQ&A、二階には研修室や図書館、レストランも備えていました。

いずれも当時としては斬新な展示であり、これらの設備の中には、現在も修理しながら使用しているものもあれば、既に撤去され別の展示に形を変えているものもあります。中でも当時から一番変わったのは、展示生物の多様さかもしれません。

現在のふるさと館では、展示水槽は開館当時の三倍となる六〇基ほどに増えました。魚類のみならず、サンショウウオなどの両生類や、ザリガニなどの甲殻類、水生昆虫や水鳥のカイツブリなども仲間入りし、展示生物は開館当時の二倍以上の一二〇種類、七千点にまで増加しています。しかし、その規模ですら、海水魚を主とする水族館に比べると、種類数も水量も決して大きいといえるものではありません。

現在よりさらに規模の小さかった開館当時の千歳サケのふるさと館が、多くの来館者を集めるほどに、広く注目を浴びたのはなぜだったのでしょう。一つは、館の看板にもなっているサケという魚が、川の魚としては魚体が大きく、遠く北洋海域まで旅をして、産卵のために命をかけ、自分が生まれた川に戻る母川回帰という生態を持つ魅力的な魚だったからなのではないかと思います。そしてもう一つは、秋になるとそのサケが群れをなして遡上する様子が観察できる「千歳川水中観察室」にあったといえるのではないでしょうか。世界初ともいえるこの水中観察室は、今日においても当館の最大の見所となっています。

千歳川水中観察室の貴重な記録

千歳川水中観察室は千歳川の護岸の一部で、石狩川河口から約七〇㌔上流の千歳川左岸に位置しています。水中に設けられた縦一㍍、横二㍍の七つのアクリル製観察窓からは、囲いもなく、給餌もせず、開館時間中に日没を迎える冬季以外は照明もしない、人の手が加わるのは窓掃除のみという、ありのままの川の中の様子を観察することができます。魚道ではなく、川そのものに設置されたこのような水中観察施設は、世界でも他に例を見ないものです。

当然ですが、水中観察室を利用すれば水中に潜ることなく、魚類をはじめとする水生生物の観察、調査を手軽に行うことができます。千歳サケのふるさと館ではこの利点を活用し、千歳川における館周辺の魚類相調査の一環として、平成七年五月からほぼ毎日、観察された魚種とその数を記録し続けています。これほど長期にわたる水中観察の記録は、潜水の必要が

ない水中観察室によって初めて可能となったものと思われ、水生生物の生態に関わる知見を得るというだけでなく、河川生態系のモニタリングにおいても、重要な役割を果たすと考えています。

観察記録においては開館以来、平成二十四年七月までに魚類だけでも三九種類が確認されています。その中には、希少種であるイトウの出現や、海水魚のメナダが、河川を七〇㌔も遡ったという恐らく日本で初めての観察記録、また千歳川で五〇年近く確認されなくなっていたアユの再発見など、水中観察室なくしては得られなかったと思われる貴重な記録が多数含まれています。もちろん、魚類以外にも、水生昆虫や貝類、甲殻類、鳥類から哺乳類にいたるまで、水中観察室からは実に多様な生物が観察され、季節に応じた生き物たちの様々な営みを目にすることができます。

春、川の中はこれから大航海へ旅立とうとするサケ稚魚の群れでにぎわい始めます。彼らが海へ旅立つ頃には、入れ替わるようにサクラマスやカワヤツメが海から遡上してきます。赤い婚姻色を身にまとい、川底を埋め尽くすほどの大群で産卵するウグイたちで華やぐ夏は、ヌマガレイやミンクなど、多くの珍客が姿を見せる季節でもあります。そして秋、ついに主役のサケの登場です。六〇㌢ほどもある大きな魚体が群れ泳ぐ姿は、他の川魚にはない圧倒的な迫力を持っています。

陸上が雪に閉ざされる冬、観察窓の前ではサケの自然産卵が始まり、その卵を狙って潜水する水鳥の姿も見られます。従来水面でエサを採り潜水しないと考えられていたマガモが、サケの産卵を狙って潜水する姿を確認できたのも水中観察室の成果の一つです。目の前で展開するこうした四季折々の川の変化と、そこに生息する生物たちの営みは、その多くが、水槽展示では再現困難なものであり、川そのものだからこその圧倒的な迫力と規模で私たちに感動を与え、いつまで見ていても見飽きることがありません。

しかし、水中観察室を通して得られるものは、決して好ましい情報ばかりではありません。空き缶や空き瓶など、流れてくるゴミの多さは想像以上のものでした。ビニールの買い物袋を目にする頻度が減ったのは、近年のエコバッグ利用増加による予想外の効果の一つです。また、平成十六年九月に上陸した台風18号によって、千歳川上流域や支笏湖周辺の木々がなぎ倒されて以来、窓から見る川の透明度が明らかに落ち、川底にも細かな泥状のものが多く堆積するようになり、ウグイの産卵などにも影響を与えています。希少な魚が近年、姿を見せなくなってきたというデータもあれば、開館当初はほとんど見られなかった外来生物の出現頻度が明らかに増加したりといった情報も得られています。

清澄な水をたたえ、変わらず美しく流れ続けている千歳川に見えますが、少しずつ環境の悪化が進行しつつあるように思えます。こうした状況の変化は、間もなくオープンから二〇年が経とうとしている千歳サケのふるさと館についてもいうことができます。

千歳サケのふるさと館とサーモンパークのこれから

順風満帆に見えた千歳サケのふるさと館のオープンでしたが、順調に伸びていた入館者数は平成九年度の二七万六八四六人を頂点に、徐々に減少し始めます。その後、いくつもの大きな転機に見舞われることになります。千歳サケのふるさと館二階のレストランが撤退してしまったのもこの頃でした。十三年度には、その頃入館者数が増加しつつあった台湾からの来館を狙い、毎年十二月一日から一ヵ月半ほど設けていた冬季の整備休館を、二週間ほどに短縮しました。そして、千歳市民に向けて通常料金よりも安価に、購入年度中何度でも入館可能な「さーもんず・カード」が発行され

ました。

平成十七年には、千歳サケのふるさと館周辺の賑わい創出につながればと、サーモンパークが道の駅に認定され、公園部分に店舗等もできましたが、期待したほどの効果は見られませんでした。

展示内容にも様々に工夫を凝らし、変化を持たせてきました。サケの成長ステージによって季節毎に変化する常設展示のほか、毎年夏には大規模な企画展も開催してきました。飼育研究の面でも、平成二十一年十二月には困難とされている淡水飼育でのシロザケの成熟に世界で二番目に成功しました。また、当館と北海道大学水産学部、美深チョウザメ館の三機関が共同で行っているチョウザメ類の繁殖研究では二十三年六月、北海道初となるシロチョウザメとアムールチョウザメ両種の人工孵化にも成功しました。また、日本唯一のシシャモの飼育にも挑戦中であり、今年も飼育日数の記録を大きく塗り替えています。

写真４　水中観察室から見たサケの群れ　観察室にある７個の窓は、ひとつが縦１ｍ横２ｍと大きい

展示だけでなく、イベントや体験学習プログラムにも力を入れています。サケの採卵実習やサケ稚魚の放流体験のほか、サケ皮を用いたクラフト作り、アイヌ民族のサケ漁と解体、サケ鍋作りと試食など、サケの生物学的な側面のみならず、文化、経済などサケが持つ多面的な要素を伝えられるように構成された特色ある学習プログラムは、全国の水族館の中でも高い評価を得られるようになりました。こうした、様々な取り組みを行っては来ましたが、入館者数の減少に歯止めはかかりませんでした。

しかし、光明も見えてきました。現在、道の駅・サーモンパーク千歳のリニューアルが、進められつつあります。当館としても、この機を逃す手はありません。新たな魅力作りに結びつけ、多くの皆さまに喜んでいただける水族館にしていきたいと思っています。そして、森と海の命をつなぐサケのふるさと千歳川に窓を持った水族館として、今後も生き物たちの魅力を伝えるとともに、河川環境やそこに棲む生物の保全に力を注ぎたいと考えています。

参考資料

千歳青少年教育財団『千歳青少年教育財団20周年記念誌』　平成十五年／『千歳サケのふるさと館10周年記念誌』　平成十七年

参考資料　水中観察室の窓から見た生き物たち

写真５　水中観察室に夏の到来を告げるウグイ属の産卵　何千というウグイが群れる様子は秋のサケ遡上に次ぐ迫力です

写真６　平成23年10月17日に幻の魚イトウが登場　平成６年９月の開館以来、イトウの姿が確認できたのはこの時の１匹のみとなっています

写真７　多くの渡り鳥がやってくる冬　水中観察室でも水中のエサを求め潜水する鳥たちの姿を目にすることができます　写真は顔に白斑があるホオジロガモのオス

写真８　水中観察室に登場する唯一の哺乳類アメリカミンク　泳ぎが得意な彼らは素早い動きでエサの魚を捕らえていきます